



# ふるさと教育「よき地域社会人」の育成

～コロナ禍でみえた、オンライン・オフラインを融合した実践～

岐阜県立郡上北高等学校教諭 熊崎 孝之

## 1. はじめに

本発表は、コロナ禍において地域をテーマにした課題探究型学習を、オンラインとオフラインを併用して取り組んだ実践の記録です。

本校は創立72年目の中山間地域に所在する1学年3クラスの小規模校です。定員120名に対し、毎年100名前後の生徒が入学しています。進路希望は進学・就職それぞれ半々で推移しており、1クラス内に国公立大学への進学希望から就職希望まで多様な進路希望の生徒が混在しています。令和元年度には、本校が実践している「よき地域社会人の育成」のための地域活動が評価され、地域協働活動における文部科学大臣表彰を受賞しています。



県知事と県教委に活動報告をする生徒



発表プレゼンはこちら、もしくは小社Webページへ

本校は令和元年度入学生より単位制普通科となり、カリキュラムが大きく変更されました。生徒は、1年次では商業科目をとらない共通カリキュラムを履修し、2年次には進学コース、福祉・介護コース、地域産業コース、観光・ビジネスコースから興味関心や進路希望に基づいて選択をします。商業科目は観光・ビジネスコースが24単位、福祉・介護コース、地域産業コースは希望すれば最大7単位を履修することができます。また、新学習指導要領を見据え、地域をテーマに探究する学校設定科目を開講しており2年次より選択できます。この背景には、徐々に活発になってきた地域活動が放課後や休日

偏っていた現状から、より多くの生徒が参加しやすい環境づくりと教員の負担軽減を目指す意図がありました。

## 2. ふるさと教育の動向

本校では、地域の当事者の一員としての自覚をもち、より良い地域コミュニティを構築できる「よき地域社会人」の育成に取り組んでいます。本校のような中山間地域に所在する学校では、地域から人口を流出させないために、生徒が積極的に地域の人々と関わり、地域の魅力を知る機会を設けることで愛郷心を育むことが重要であると考えています。

本校では生徒が地域活動に参加をした平成27年度から郡上市内へ就職する生徒が増加しています。また、進学希望者の面接においても、将来は郡上市に戻って就職したいと答える生徒が多くなっている実感があります。特に、地域活動に意欲的に参加していたクラスの就職希望者のうち8割以上が郡上市内での就職だったことや、進学してからも郡上市内に戻って働いていることから、地域活動に参加することは、地域の当事者として地域に貢献したいと考える生徒の育成につながるのではないかと推察されました。

## 3. コロナ禍による学びの中断

本校では、令和2年度からこれまでの地域活動の質を高めるべく、地域をテーマにした「課題探究型学習」に重点を置いた学校設定科目を開講しています。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により2月末から5月までの期間は、休校措置がとられることになり、年間計画を変更する必要がありました。また、感染予防の観点から、これまでのような

フィールドワークに制約ができました。これは、開講するにあたり数年間かけて準備してきたものを一旦見直す必要に迫られたこととなります。外部講師による講話をキャンセルしたり、予定されていた内容を見直したりと、4月当初は大きな混乱に見舞われました。

コロナ禍の収束が見通せない中で、課題探究型学習を縮小することも検討しました。しかし、休校期間中に実施した「オンライン授業による探究活動」に手応えを感じたこともあり、これまでのようなフィールドワークにこだわるのではなく、この時期だからこそオンラインを活用して、これまで対話できなかった人たちと学び合う「新しい学習方法」を導入することにしました。

#### 4. オンライン・オフラインの学び

本実践は、校内組織である学校設定科目検討委員会が中心となって推進しました。私は、そのメンバーの一員として、また商業科主任として担当しました。ここからは令和2年度前期に実施された取り組みを2例ほど紹介します。

##### (1) 観光冊子「郡上探訪 郡上であそぼ」制作

- ・授業名：地域産業探究（学設科目）6単位
- ・生徒数：2年生10名（男子9名・女子1名）
- ・実施日：6月4日・11日・18日・25日

7月16日・30日・8月4日（計7回）

8月まで校外での実習を自粛せざるを得ない状況下でしたが、シラバスには企業実習以外にも郡上市内の産業を知るという観点があり、この自粛期間においては、郡上市を知ることに重点を置いた実習を組むことにしました。オリエンテーション等を実施していく中で、生徒から「コロナ禍で郡上市外へ出かけることが難しい時だからこそ、地域の観光地を郡上市民に知ってもらいたい」という提案があったため、意向を汲んで観光冊子を作成することにしました。しかし、本校には観光冊子をつくるノウハウがないため、研修旅行で利用していた沖縄の観光冊子「おうらい」を作成している岐阜女子大学教授の久世均先生に現状を伝え、協力を願いました。県内の大学とはいえ、コロナ禍の状況で来校しての指導は難しいこともあり、オンラインでの指導になりま

した。オンラインのツールはZoomを利用しました。なお、オンライン指導は大学側がホストになり、本校の生徒は学校から貸与されたタブレットで参加しました。



教授にコンテンツのプレゼンをする生徒（オンライン）

毎週、久世先生から「観光冊子のカテゴリーを何にするのか」、「そのカテゴリーに掲載するコンテンツは何にするか」といった課題をいただきました。生徒は課題に対して、試行錯誤しながらもKJ法などで意見をまとめ、タブレットで原稿を作成しました。

しかし、観光冊子を作成する中で、問題点が出てきました。それは、実際に現場へ行っていないため、読み手を惹きつける紹介文が書けないということです。幸い、郡上市内ではコロナウイルス感染者がいなかったこともあり、7・8月の2回に渡ってフィールドワークに出かけ、観光地の取材をすることにしました。フィールドワーク後には、「郡上市に住んでいるのに、これほど立派なアスレチック施設があることを知らなかった」などの感想があり、生徒にとって郡上市の魅力を再発見する機会になりました。



フィールドワークをしている生徒（オフライン）

なお、この観光冊子は岐阜女子大学主催「文化創造デジタル作品コンクール」において奨励賞を受賞しました。完成した冊子は生徒の発案で、郡上市内の観光拠点に設置するだけでなく、郡上市を修学旅行や遠足先を選んでもらえるよう、岐阜県内の市町教育委員会や近隣県の教育委員会に配布しました。この取り組みは、令和3年度から科目「観光学基礎」(2)で紹介へ引き継ぎ、海外からの観光客用

にコンテンツの追加ならびに英語に翻訳したものを作成する予定です。



郡上市長・郡上市教育長への報告



生徒の作品はこちら、  
もしくは小社 Web  
ページへ

## (2) 観光プランの交流

- ・授業名：観光学基礎（学設科目）2単位
- ・生徒数：2年生 24名（男子 13名・女子 11名）
- ・実施日：6月11日・7月2日・30日（計3回）

観光学基礎は、平成30年3月告示の新学習指導要領で示された新たなる科目「観光ビジネス」を念頭に設置された科目です。

本校は当初、県有施設や市の保有するホテルでの実習を検討していましたが、コロナ禍において観光施設での実習は困難であると考えました。そこで、B-1グランプリなど食を通じて地域の魅力を発信する活動をしている奥美濃カレーファミリー協同組合との連携活動で親交のあった四日市とんてき協会代表で四日市大学教授の小林慶太郎先生に相談し、小林ゼミの学生17名と「観光」をテーマに、オンラインで合同の授業を実施することにしました。

授業ではお互いが相手の学校の所在地である四日市市・郡上市の観光資源について調査し、発表しました。本校の生徒は、四日市市の富田一色けんか祭という風変わった祭を発表する生徒や、中学の既習事項である四日市ぜんそくを結び付けて、かつては悪いイメージでも現在は夜景スポットとして観光地になっていることを紹介しました。その一方、四日市大学の学生からは、郡上市の長良川鉄道や食が観光資源になるという発表が大半を占めました。本校の生徒にとっては、食が観光資源になるというイメージはもてていましたが、長良川鉄道は便数が少なく不便な乗り物だと感じていた生徒が多く、驚きが大きかったようです。その後、生徒は郡上市の観光資源を見直し、四日市大学の学生に長良川鉄道の駅から観光地までの移動手段が乏しいことや自然豊かな観光地は大型バスでの移動が難しいことから、

駅発着のタクシーによるツアーを提案しました。対象となる顧客層やオプションツアーサイトで販売するなど、具体的に提示していたことが印象的でした。また、発表後に四日市大学の学生からコメントをもらうことで、取り組みの省察につなげることができました。生徒の感想から、郡上市を他の市と比較することで客観的な視点が養われ、郡上市の新たな魅力を認識したことがうかがえました。この観光プランは、他県生徒とのオンラインミーティングでも意見交流しており、ブラッシュアップを重ねています。

## 5. 活動の広がりや成果

オンラインで他の地域とつながる様子を多くの教員に参観していただく中で、その価値が校内でも広まりつつありました。様々な場面で、オンラインだからこそできることが検討されました。その例として、教科から学年への広がりをご紹介します。本校は普通科高校ですので、総合的な探究の時間が週1時間設けられています（多くの商業高校では、課題研究で代替されていると思います）。総合的な探究の時間の目標は、総合的な学習の時間から大きく変わりました。総合的な学習の時間の目標は「自らの在り方生き方を考えることができるようにする」と書かれており、このことから現在でも多くの学校が進路指導に関するガイダンスなどを実施していると思います。その一方、総合的な探究の時間の目標は「探究活動を通して自らの適性を知る機会を設ける」とあります。本校では、オンラインを利用した講話を実施することで、生徒の思考力や粘り強く探究する力を養い、視野が広がることを期待しました。沖縄県の観光業を学ぶオンライン講話や、説得力のある文章を書くためにエビデンスの大切さを学ぶ講話などを5回実施し、生徒は自らの思考の変容や成長の実感をワークシートに記入していました。いずれの講話でも生徒は普段接することがない人たちとの対話に興味・関心をもって臨んでいました。

当初は科目単位で他の地域とつながり対話をする楽しさを知った生徒でしたが、総合的な探究の時間で学年単位に広がり、さらには課外活動である郡上市総合計画策定に向けた市民意見を提案するみらい

会議（オフライン）に参加するなど広がりを見せました。この会議で出された、郡上市の活性化のために廃校となった校舎を観光や市民活動の拠点として活用する提案や、少子高齢化が進む中で支えあう社会づくりのために高校生サポーター団体をつくる提案は、オンラインツールを利用して郡上市民に発信され、地域の方と実現に向けて動き出しています。

さらには、このような地域活動は、学年の壁を越えて学校全体に広がりつつあります。特許庁が主催する全国地域ブランド総選挙には1・2年生徒の25%にあたる44名が参加しました。これは、オンライン上で全国の高校・大学と競い合い、ご当地グルメの「奥美濃カレー」を再ブランディングしていくことで、郡上市の観光を活性化するという活動です。生徒は、奥美濃カレーの認知度は高いが食べることがない生徒が多いというアンケート結果に着目し、カレーを飲食店でわざわざ食べないという層をターゲットに、自宅で気軽に奥美濃カレーが食べられる「奥美濃カレーのもと」の商品開発をしています。生徒が業者に交渉し、教員を巻き込んで実験をしています。また、奥美濃カレーの活動に参加している明治大学生が実験の助言のためにオンラインで参加するなど、オンラインを利用した探究は、距離を問わず多くの人を巻き込むことができることがわかりました。



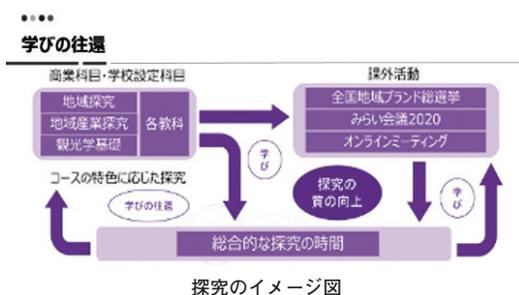
オンラインとオフラインのハイブリッドで活動する生徒

この活動中にある生徒が「計量や実験の方法で化学や物理が役立つことを実感したし、原価のことや流通方法などマーケティングの基礎知識がないと商品開発が難しい」と言いました。他の生徒も言葉にこそしませんが、試行錯誤をする姿から、もっと専門的なことを知りたい、学びたいという意欲が見られました。何よりも、生徒のワクワクした姿からは主体性を感じとれました。これは、生徒自身の中で活動と教科の学びのつながりを実感し、学習意欲を

高めた瞬間であると感じた出来事でした。また、市内のショッピングモールで行われたトークショーで、地域活動へ積極的に参加していた生徒の「迷っているなら郡上北高校に入学したほうが良い」と断言している姿を見て、本校での地域をテーマにした課題探究学習の経験は生徒の自己肯定感の高まりに寄与していると確信しました。

## 6. おわりに

このように、コロナ禍だからこそできるオンラインの学びを取り入れたことで、本校が令和2年度から導入した課題探究型学習に深みができました。生徒は、科目（教科）、総合的な探究の時間、地域での活動のそれぞれで得られた知識や新しい視点を、それ以外の場でも発揮し、さらに探究のサイクルをまわして質を高めています。この学びの往還こそが、本校が今後目指すべき探究の姿だと感じています。



このような実践は個人で実施することはできません。本校は管理職の理解や、職場の人間関係の良さが後押しになって実現されています。「コロナ禍において学びを止めないようにしたい」、「地域とのつながりを大切にしていきたい」という学校の方向性が教員間で共通認識されていたからこそ実現されたのだと思います。何かを始めるときのハードルは高いものです。しかし、管理職や同僚、他校の教員とコミュニケーションをとり、生徒のために何ができるかを考えていけば自然と協力体制ができるものだと実感しました。

本実践の横断的な学びが新学習指導要領における「課題研究」の授業改善の一助なることや、地域との連携の事例が「観光ビジネス」の参考になれば幸いです。